

「生徒指導の三機能を生かした授業づくりについて研修することで、不登校等の未然防止に重点を置いた組織的な取組及び生徒指導と教科指導の一体化に向けた生徒指導主事の役割を確認し、市内小・中学校における積極的な生徒指導を推進する。」ことを目的として研修会を実施しました。

【平成28年度庄原市内小・中学校における生徒指導上の諸問題の現状と対応について】

暴力行為の発生件数は、15件（小学校12件、中学校3件）であり、平成27年度の9件から6件増加している。小学校の12件の内訳は、生徒間暴力が9件、対教師暴力が1件、器物損壊が2件となっている。中学校は、生徒間暴力が3件であった。暴力行為については、生徒指導規程に基づく毅然とした生徒指導体制を確立すること、庄原警察、北部こども家庭センター、医療機関等との連携により、児童生徒の実態に応じた適切な指導・支援を行うこと、保護者の理解・協力を得ながら、継続した指導を行うことが大切である。

いじめの認知件数は37件で、平成27年度の19件から18件（約2倍）増加している。また、平成27年度、いじめを認知した小学校、中学校はいずれも3校、合計6校であったが、平成28年度、いじめを認知した小学校は10校、中学校は4校、合計で14校となっている。

いじめの問題については、日常の児童生徒の小さな変化を捉えるとともに、校内のいじめ防止委員会を中心としたアンケート調査や面談等、早期発見、早期対応、早期解決に向けた組織的な取組を継続して行うことで、いじめを解消することが大切である。

不登校児童生徒数は、34人で、その内訳は小学生6人、中学生28人で合計34人となっている。不登校を「人間関係」「あそび・非行」「無気力」「不安傾向」の4つに分類すると、「無気力」が5割以上と最も多く、次に「人間関係」「不安傾向」がそれぞれ約2割となっている。また、学業の不振が不登校の要因の1つと考えられる児童生徒は、全体の3割を超えている。

不登校の問題を解決するためには、魅力ある学校づくりや授業改善等未然防止の取組が必要である。

講話・演習「児童生徒の学ぶ意欲を引き出す生徒指導の三機能」講座

広島県立教育センター 特別支援教育・教育相談部 指導主事 竹谷 浩子

1 学ぶ意欲と生徒指導の三機能について

自己決定感（自分のことは自分で決めているんだという気持ち）は「自己決定の場を与えること」、有能感（できるんだという気持ち）は「自己存在感を与えること」、他者受容感（周りの人から受容されているんだという気持ち）は「共感的人間関係」と密接な関係にあることから、生徒指導の三機能は学ぶ意欲を支える土台と言える。

研修の様子



2 生徒指導の三機能を生かした授業づくりについて

生徒指導の三機能を生かすために、学校づくりの三層モデルが参考になる。学校づくりには階層性があり、①生活・学習規律の確立（個人の規律）、②授業規律の確立（学校や学級等集団における規律）、③授業づくりを意識した取組が必要である。

授業づくりの前提として学級が単なる集合ではなく、学習集団であること（例：学習課題をめぐって児童生徒同士のやりとりがある、力を合わせて成し遂げようとする目標がある、守るべきルールがある、仲間意識がある、（児童生徒を）引き付ける魅力がある、場面にふさわしいリーダーシップを児童生徒が発揮するなどが挙げられる）。

その他、授業づくりの前提として、よい雰囲気をもっている学級づくり（例：「安心感」に満ちていること、「刺激」があること）、分かる授業づくり、知識を活用させるためのノート指導、記憶を意識した授業の働き掛けの工夫が必要である。

3 学級における集団づくりについて

児童生徒の傾向	対応例
問題行動を真似する児童生徒（学習の理解度が低い。幼児性が強い。基本的な生活習慣が身に付いていない。依存性が強い。）	小さな頑張りを見逃さずほめる。学習支援により、授業への参加感を高める。自己判断、自己決定の力を育む。
わざと刺激する児童生徒（学習の理解度は中程度。人の失敗を見付ける。言い訳をする。目立ちたがる。よく気が付く。）	一緒に行動することで、適切な関わり方を育てる。座席を工夫する。「孤立型タイプ」には高い目標を設定し、「集団型タイプ」には一人一人に役割を与え、感謝の気持ちを育てる。
“影”でコントロールする児童生徒（学習の理解度が高い。大人と子供の前で態度が違う。周囲の子供たちから一目置かれている。大人への不信感がある。生活にストレスを感じている。）	粘り強く向き合い、しっかり話を聞いて、教員との信頼関係を構築する。他の児童生徒の前では叱らず、知的にほめる。ストレス解消法やストレスマネジメントを指導する。
クラスのトラブルを楽しむ児童生徒（何度か我慢させられたと思っ込んだ経験がある。先生がひいきしていると思っている。自分も頑張っているのにと感じている。）	指導のブレをなくす、教員がよきモデルになる言葉遣いを意識する。励まし、やわらかい関わり方をする。

【事後アンケートから】

- 生徒指導の三機能を生かした取組を、「学びの変革」アクション・プランの取組と関連させ、両輪で進めていけるよう校内研修にも位置付け、深めていきたい。また、一人一人の児童生徒に必要な支援を行っていくことの大切さについても議論したい。
- 生徒指導の三機能が学ぶ意欲（授業づくり）とどのように関連しているかを確認し、日々の声かけや接し方を変えていきたい。また、目標を達成するために一人一人の支援の必要性について考えたい。